



ホームページ http://www.hokkyodai.ac.jp/edu_center_remoteplace/
メールアドレス kus-hekiken@j.hokkyodai.ac.jp
☎ 0154-44-3291 FAX 0154-44-3292

全国へき地教育研究大会・北海道へき地複式教育研究大会からとらえる へき地・小規模校教育実践研究の展望

北海道教育大学へき地・小規模校教育研究センター
センター長 玉井 康之

へき地・小規模校教育研究センターでは、へき地・小規模校教育の水準を高めるためにも、全国・全道の研究集会の情報を収集し、それらを各地域・各キャンパスへ持ち込むようにし、また、それぞれの先生方が持つ研究・教育の情報を積極的に交流することで、各人の発想や研究・教育活動の内容を豊かにしたいと考えています。

この間、全国へき地教育研究連盟主催の全国へき地教育研究大会京都大会、および北海道へき地複式教育研究連盟主催の全道へき地複式教育研究大会後志大会が開催されました。本号では、そこに参加された旭川校の田中和敏へき地教育アドバイザー、釧路校の津田順二地域協働型教員養成プログラムコーディネーターの大会参加記をお送りします。

第67回全国へき地教育研究大会京都大会に参加して

へき地教育アドバイザー（旭川校） 田中 和敏

全国へき地教育研究連盟(全へき連)は、都道府県単位のへき地教育研究連盟によって構成される教育研究連盟です。北海道では、北海道へき地・複式教育研究連盟(道へき・複連)と称し、へき地級指定校だけではなく、複式学級を有する学校も加盟しています。道へき・複連は、最も多い加盟校を有し、現会長の柿崎秀顕氏(安平町立遠浅小学校長)を含む歴代7名の会長を輩出するなど、全へき連の中心となって活動してきました。

全へき連は1952年(昭和27年)から毎年持ち回りで全国大会を開催しており、本年度は京都で開催されました。京都大会では、1日目に6つの分散会、2日目に9つの分科会が設けられていました。

私の参加した分散会では、礼文町立香深井小学校、白浜町立三舞中学校の発表が行われました。少人数であることを生かし、個に応じた手立てを工夫し児童の主体性を育てる取組、ガイド学習を導入し主体的な学びを構築する実践について報告、協議されていました。また、ICT機器活用の必要性も提案されていました。

分科会では、宇治市立笠取小学校に伺いました。校舎の周りに生えている草花、その周りを飛び回る虫など、地域の自然や文化とのふれ合いを通して気づきの質を高め、深い学びを目指す生活科と総合的な学習の時間の授業が公開されました。

分散会、分科会とも、へき地・小規模校の特性を活かすのはもちろん、新学習指導要領の趣旨を取り入れた新しい教育を展望する素晴らしい実践を勉強させていただきました。

近年、児童生徒数の減少が進み、新しく複式学級ができる学校があるようです。そのような学校から「わたり」「ずらし」についての質問が分散会でも分科会でも出されていました。それに対し、教員の加配や管理職の協力により複式授業を回避しているといった回答がなされ、残念ながら複式授業の在り方についての協議が行われませんでした。

一方、北海道では複式授業の実践が数多くあり、蓄積されてきています。その実践の整理、理論付けを教育大学に期待している現場の先生方も多くいらっしゃいます。へき地・複式校の多い北海道にある教員養成大学だからこそできる取組ではないでしょうか。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

第67回全道へき地複式教育研究大会 後志大会 報告

地域協働型教員養成プログラムコーディネーター（釧路校） 津田 順二

北海道へき地・複式教育研究連盟（道へき・複連と略）は、昭和27年、第1回の全国単級複式教育研究大会が十勝で開催されたことなど、全国的なへき地・複式教育研究の先導的な役割を果たしてきました。今年度の研究大会は、9月20日・21日、後志管内で開催されました。1日目は倶知安町で全体会及び分散会、2日目は後志管内8町村での公開授業と研究協議が開催されました。

全体会では、へき地・複式教育研究大会では恒例ですが、「太陽となろう」～へき地教師のうた～の合唱で始まりました。開会式に続いて行われた基調報告では、道へき・複連の第9次長期5カ年研究推進の最終年度に当たって実践研究整理期として研究内容とその実践についての解説とともに、今大会に向けて、開催地、後志管内での研究推進の経過が報告されました。

道へき・複連は、昭和45年度より、長期研究推進計画を樹立して（第1次研究推進計画は10カ年、第2次以後は、ほぼ5カ年ごとの計画）今回の後志大会は、第9次長期研究推進計画の最終年度に当たる大会でした。

これまでの長期研究推進計画における研究主題のいくつかをあげると、次のようになっています。
(※研究紀要より抜粋)

- 第1次 「新時代を開発し、主体的・創造的に生きる子供の育成」
～へき地・複式学校の特色を生かし、児童生徒一人一人を伸ばす学校・学級経営と学習指導のあり方を研究する～
- 第4次 「郷土を愛し、たくましい実践力をもって、主体的・創造的に生きる心豊かな子供の育成」
～へき地・小規模・複式学校の特色を生かし児童生徒一人一人を伸ばす学校・学級経営と学習指導の充実・発展をめざして～
- 第8次 「主体的・創造的に学び、豊かな心でたくましくふるさとを拓く子供の育成」
～へき地・複式教育の特性を生かし、児童生徒一人一人に未来に生きる力を育む学級経営と学習指導の充実をめざして～
- 第9次 「主体的・創造的に学び、豊かな心でたくましくふるさとを切り拓く子どもの育成」
～へき地・複式教育の特性を生かし、児童生徒一人一人に未来に「生きる力」をはぐくむ学級経営と学習指導の充実をめざして～

今大会は、第9次の最終年度ということです。これまでの研究主題から道へき・複連が目標とし、目指してきたものの概要がわかります。それは、何より学びを通して「ふるさとを切り拓く」ということであり、そのために、①へき地・小規模・複式学級を有する学校の特性を生かすこと、②学校経営・学級経営及び学習指導の充実が中心となっていることです。報告で印象的であったのは、へき地・小規模・複式学級を有する学校の特性について、基調報告の中にもあげられていますがマイナスの特性をとらえつつもそれらが、特性をとらえ直すことで、教育改革の先進的な実践事例になり得ること、時に「地域に根ざした教育」が求められているという今日的動向から、新たな可能性を持ち、プラス面を見据えた教育活動が必要であることと述べられていたことでした。

開会式後、各地からの提言発表に基づき分散会が開催されました。

- 分散会Ⅰ 「学校・学級経営」
提言 「CSに関する実践事例や効果的な小中連携の在り方について」 留萌地区から
- 分散会Ⅱ 「学習指導①」
提言 「確かな読みで自分なりの考えを持たせる課題設定の工夫について」 胆振地区
- 分散会Ⅲ 「学習指導②」
提言 「資料提示の方法や発問及び書く活動の工夫について」 日高地区

分散会Ⅱに参加しました。ランダムなグループで提言をもとに協議を行い、最後に各グループからの発表でしたが、複式学級における課題設定の方法と、児童・生徒の主体的な学習にどうつなげるかなど、状況は異なりますが、各地の事例を出し合う中で話し合いを進め、実践の交流という点で意義深いものでした。

翌日（9月21日）は公開授業と研究協議でした。第1分科会寿都町立潮路（おしよろ）小学校に参加しました。潮路小学校は平成3年4月に町内の5校を統合して開校した学校で現在の児童数は35名、2・3年生（6名、2名）、4・5年生（5名、4名）が複式学級で、授業公開されました。授業は算数科で2・3年生は「かけ算」、4・5年生は「面積」の単元でした。校内研究の仮説にも「間接指導」があげられており、間接指導の中での交流場を設定することで「他者と関わりながら学習を深める」との目標に迫るものでした。

活発な授業で特に高学年は、間接の指導での交流等までにはなくても、話し合いが直接指導の場面で生きていることが顕著でした。また、低学年では黒板前で子どもたちがそれぞれの考えを述べながら交流し考えを述べ合う積極的な話し合いの姿が印象的でした。複式教育における学習は、北海道が全国でも先導的な指導様式の定型化と実践を推進してきたといえるのだと思います。しかし、このことはマニュアルとして簡単に実践できることを示してはいません。複式だからこそ、少人数だからこそ、指導には細かな配慮が求められ、手立てが必要となり、その積み上げが確かな授業構築につながるのだと思います。いわば変則的な複式学級構成である潮路小学校の先生の努力を強く感じられる授業でした。



特徴的だったのは、他では少ないと思われるのですが、学習支援員の方が3名配置されており、間接指導の充実に取り組まれていたことです。現在は、町内に中学校一校、小学校二校という現状から、町としての配慮があるのではないかと考えられましたが、支援員の方との事前の打ち合わせや、指導の形態などについては別の課題として深めることも必要になるだろうと予測されました。また、潮路小学校は近隣に北海道児童福祉があって、きめ細かな指導や児童の転出入などについての対応も必要との話を伺い、まさに個に応じた指導に日々奮闘されていることを感じ、感慨を深くしたところでした。



後志管内でのへき地・複式教育研究連盟は、管内19町村中13町村で、小学校16校、中学校1校で構成され、管内40の小学校のうち30校がへき地校で、その約5割が複式校だといいます。今回の授業公開も8町村で開催されました。第9次研究推進計画の最終年で、来年度より新たな推進計画が樹立されることとなります。新たな学習指導要領の内容に即しながら、これまでの研究の積み重ねとしての地域を拓く、豊かな心の育成、そしてそのための学校・学級経営と学習指導の充実が基調となっていくものと思われます。主体的な学びや、交流を通じた対話的な学び、更に深い学びの展開、課題は大きいのですが、へき地・複式教育を通して教育活動の根幹に関わる実践の展開が期待されます。

センターの研究活動

へき地複式教育研究連盟

センターの運営

リンク

お知らせ

現在位置 [へき地教育研究支援](#) > [トピックス](#) > 日本教育大学協会全国へき地・小規模校教育部門第1回部門会議を開催しました

日本教育大学協会全国へき地・小規模校教育部門第1回部門会議を開催しました

2018年11月20日

平成30年11月18日（日）、釧路市生涯学習センター特別会議室において、日本教育大学協会全国へき地・小規模校教育部門創設後初となる第1回部門会議を開催しました。

本部門は、本学へき地・小規模校教育研究センターが日本教育大学協会へ同部門の設置申請を行い、平成30年10月4日に開催された日本教育大学協会理事会において設立が承認されたものであり、会員間の連携により、へき地・小規模校教育に関する研究・実践交流を進め、へき地・小規模校の振興とその担い手としての教員養成を目的としています。

当日は、全国の部門会員76名のうち、前日11月17日（土）に開催した「北海道教育大学へき地・小規模校教育推進フォーラム」に参加いただいた全国各地の部門会員28名が出席して、部門規程制定、運営体制及び研究紀要の発行等について審議しました。

その後、参加した会員の所属する全国の国立大学等におけるへき地・小規模校実習の実践内容、実習の現状及び諸問題等について、会員から多くの情報が提供されました。

会員間のネットワーク構築及び今後の部門運営等について共有できる情報等もあり、大変有意義な会議となりました。



会議の様子



玉井代表（右）と川前副代表（左）



実践報告の様子